海岸沿いを疾走する参加者　＝氷見市栄町

氷見を疾走 絶景満喫

ツール・ド・のと最終日

万感ゴール

休憩ポイントで飲食物を補給する参加者
＝氷見市の比美乃江公園多目的広場

3年ぶりとなる「ひゃくまん穀プレゼンツ第34回ツール・ド・のと400」（同実行委、富山新聞社、北國新聞社主催）は最終日の19日、七尾市から氷見市を経由して金沢市までの約120キロで行われた。出場者は氷見の絶景を楽しみながらゴールし、万感の表情で能登半島一周約420キロを巡る3日間を終えた。

大会は、1906（明治39）年に北國新聞社が主催した石川県内初の自転車ロードレースを源流とする。最終日は出場者が午前7時半に七尾市和倉温泉を出発し、金沢港クルーズターミナルを目指した。

チェック・休憩ポイントとなった氷見市の比美乃江公園多目的広場には、午前9時過ぎに先頭集団が到着。同市サイクルスポーツ協会の元会長の濱井祐雄さん(81)らが出迎え、市職員らが飲み物やおにぎりを配った。

氷見市内は富山湾岸の絶景を楽しみ、田園地帯を抜けて山越えするコースとなっている。協会事務局長の河原忍さん(46)は「参加者の姿を見ていると刺激を受けて一緒に走りたくなる。氷見の魅力を精いっぱい感じてほしい」と話した。

神戸市から仲間3人と参加した金本仁在さん(48)は、氷見の美しい海岸線について「海越しに山が見えるのが素晴らしい。心配した台風にも遭わず、3日間走るなかで新しい友人もできた」と満足げに語った。

ゴールの金沢港クルーズターミナルでは、出場者が仲間と記念撮影するなどして完走を喜んだ。大会常連の中村真也さん(41)＝金沢市＝は、坂を登り切った時や、ゴールした時の達成感が大会の魅力とし「今回は新型コロナウイルスで参加しなかった仲間もいるので、次はもっと大勢で走りたい」と意気込んだ。